友の会講演会 実施報告

■第469回■8月5日（土）
【みんぱく名誉教授シリーズ】

民族学で解く 千里ニュータウンと大阪万博

中牧 弘允（吹田市立博物館長、民博名誉教授）

千里ニュータウンに暮らしはじめた住民の多くは一九六〇年代に「出オオサカ」を果たした都市民です。地方から大阪に移り住み、居住環境の改善を求めて北摂の郊外に「新天地」を求めた人びとが中心です。若い世代が多く、核家族が基本で、父系的な「家」の観念は薄く、数百年の伝統を誇る「家屋敷」をかまえた「地下（じげ）」とよばれる村人とは異なる文化を形成しました。

千里ニュータウンの景観も「田園風景」から「田園都市」へと変貌しました。大阪府が「住宅難の解消」という錦の御旗を掲げ、千里丘陵の地域住民を粘り強く説得した結果としてニュータウンは誕生しました。一二の近隣住区制をとり、「宗教施設をつくらない」「クルドサック（袋小路）で車を制限する」「裏町をつくらない」などの掟を敷き、あたかもモーセに率いられた古代イスラエルの一二氏族のように定着しました。そこでの暮らしもまた洋式トイレ、ユニットバス、ダイニングテーブルなどに象徴されるような新しい生活様式が率先して取り入れられました。「Ｈａｎａｋｏ族」とよばれた主婦たちの暮らしぶりも民族誌にまとめられています。

一九七〇年の大阪万博もまた千里丘陵に多大な文化的影響を及ぼしました。民博の創設はそのひとつですが、国立の大学や病院をはじめとする国際色豊かな町づくりが先端的に推進されています。

詳細については、『季刊民族学』一六一号の特集「千里から考えるニュータウンとそのゆくえ」を是非ご覧ください。

千里ニュータウンの核家族（撮影・産木民彦）

■第470回■9月2日（土）
【開館40周年記念特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」関連】

シーボルト父子が集めたアイヌ文化

佐々木 史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹）

江戸時代後期から幕末期にかけて日本に滞在し、膨大な量の日本資料を収集し、ヨーロッパの日本研究の基礎を築いたフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、またアイヌ文化にも大きな関心を寄せていました。すでに第一回目の来日時（一八二三〜三〇年）に八〇点ほどの資料を網羅的・体系的に集めています。また、幕末の二回目の来日（一八五九〜六二年）の時にも、数こそ少ないですが、イラクサ繊維の織物を仕立てた上衣（テタラペ）、樹皮繊維の前掛け、ガラス玉、アイヌの人びとの姿を描いた絵画、北方関係の地図などを収集しています。これらの資料はオランダ、ライデン市の国立民族学博物館とドイツ、ミュンヘン市の五大陸博物館にそれぞれ収蔵されています。

彼がアイヌ文化に興味を示し、資料を収集したのは、それを知ることで日本文化をより深く理解することができると考えていたからでした。そしてそのような考え方は、ドイツで父親の資料整理を手伝いながら日本文化に深い興味を抱いた次男のハインリッヒ・フォン・シーボルトに受け継がれます。ハインリッヒはアイヌの文化に土器や石器を使っていた時代の人びとの文化を見ていました。彼は一八六九年に初来日を果たすと、外交官の仕事の傍ら民具収集と遺跡の発掘などの調査研究に従事するようになります。一八七八年には北海道を訪れ、七五点ほどのアイヌ資料を集めました。それらは現在ウィーンの世界文化博物館に収蔵されています。

ドイツ、ミュンヘン市の五大陸博物館
（旧民族学博物館）

お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつでも、どなたでもご入会いただけます。

国立民族学博物館友の会
一般財団法人 千里文化財団

〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1（国立民族学博物館3階）
電話：06-6877-8893（平日9:00〜17:00）　FAX：06-6878-3716
e-mail：minpakutomo@senri-f.or.jp
http://www.senri-f.or.jp/

もっと早く、もっとたくさんの情報を手に入れたい方に

Twitter
『季刊民族学』をよりお楽しみいただける、最新情報、見どころなどを発信します。
https://twitter.com/KMinzokugaku

Facebook
「友の会ニュース」では紹介しきれない友の会の催し、刊行物などの情報を提供します。
https://www.facebook.com/minpakutomo